

# 言語的・身体的コミュニケーションが育む 学生の意識と行動変容

仲本美央<sup>1</sup>, うすき友美<sup>2</sup>  
林房吉<sup>3</sup>, 伊藤美和<sup>3</sup>

## I. はじめに

現在、大学教育においては四年間の教育期間でどのような教育展開をし、専門職への深い理解と知識を培い、現場での実践力として育成していくのが大きな課題の一つとして課せられている。どのような専門職を目指す学生にとっても、自らの専門職としてのIdentityを確立し認識を深めることは、大学生活において重要な課題の一つであると考えられる。仲本(2008)は福祉系大学の授業において、この専門職Identityを生み出す授業プログラムの計画・実施と、取り組みを行った学生の意識と行動変化を報告している。この報告の中では、福祉専門職を目指す学生にとって専門職Identityを育むためには、「福祉領域における知識の習得」「当事者の立場や福祉社会にとって必要なことへの興味・関心」「当事者との触れ合い・交流」「自他共に向けた振り返り」「他者・地域・社会に向けられた視点」が重要であると述べている。また、その専門職Identityを育むためには、さまざまな専門職Identityを生み出す授業プログラムの開発が必要であることも述べている。

筆者らは、平成21年4月から7月にかけて、淑徳大学総合福祉学部の授業科目『自由演習C』において、この福祉専門職を目指す学生にとって専門職Identityを育むための授業プログラムを計画し、実施した。特に、「当事者の立場や福祉社会にとって必要なことへの興味・関心」「当事者との触れ合い・交流」「自他共に向けた振り返り」に重点を置き、大学二年目の段階で福祉専門職を目指す学生としてのコミュニケーション能力を育むプログラムの開発を試みた。本稿は、筆者らの授業プログラムの計画・実施と、言語的・身体的コミュニケーションを通して育まれた学生一人ひとりの意識と行動変容を報告および考察し、今後の可能性を探るものである。

---

<sup>1</sup>淑徳大学, <sup>2</sup>レセラ有限公司, <sup>3</sup>淑徳共生苑

## Ⅱ. 大学としての「自由演習」の科目内容とその位置づけ

淑徳大学総合福祉学部においては、1年生から4年生までの四年間にかけての共通演習科目として「基礎演習」「自由演習」「専門演習」「卒業演習」が開講科目として設置されている。

1年生必修科目として実施されている「基礎演習」は、「自分の興味や関心を深く探究して、自分の心の世界を豊かにかつ広げられるように、基礎的な学習の仕方や表現の方法について学び、基礎的な学習能力を身につけること」をねらいとし、前期に「仲間づくり・グループでの調べ学習・発表」、後期に「文献研究・フィールド調査・体験・聞き取り・アンケート調査」などを目標としている。また、この科目は、全国多数の大学で重視され各取り組みが強化されている「大学生活の導入教育」の場としても位置づけられているため、学生の基礎的な学習能力だけではなく、対人コミュニケーション能力等の社会性を育む場・自ら大学生活を歩むための主体的な活動を育む場としても重要である。3年生選択科目として実施されている「専門演習」と4年生必修科目として実施されている「卒業演習」は、各専門領域の教員の元で研究を深めるための科目であり、いわばゼミ選択の科目となっている。

これら1・3・4年生の演習科目に加え、2008年より選択科目として設置されたのが2年生の「自由演習」である。大学のより充実した個別の教育と四年間の流れのある演習教育を目指し、設置された科目である。この科目の演習内容と形態は、各担当教員がプログラムし、実施されている。

## Ⅲ. 「自由演習C」の授業内容

### ① 講義概要（授業のねらい・方法・計画内容）

2009年度の淑徳大学総合福祉学部講義概要には、下記のa～cの通りにねらい・方法・計画内容等を明記した。

#### a. 授業等のねらい

本講義では、受講生が高齢者との触れ合い体験を通して、福祉における「自分」や「あなた」という対人関係づくりの大切さに気づき、「人」と「人」とが共に生きる「共生」の意識を育むことを目的とする。授業前半では、自分に気づき、他者とかかわることをテーマとした講義やグループワークを行い、授業後半では、実際に高齢者との交流を通して触れ合い体験をし、授業後半では、体験して感じたこと・考えたことをグループごとに分かれて話し合い、発表していく。

b. 授業の方法等/受講に際しての事前あるいはまとめの自己学習

- <授業の方法等>
- ・人間関係づくりに必要な知識・教養を学ぶ
  - ・肌の触れ合い（ハンドマッサージ）を通した体験を行うため、ハンドマッサージの理論と技術を学ぶ
  - ・高齢者との触れ合い体験をする
  - ・互いに体験したことを発表し、ディスカッションする
- <受講に際しての事前あるいはまとめの自己学習>
- ・事前学習は、各回の授業終了時に指示する。さらに、次回の講義内容を読んで学生各自が事前知識として必要な学習を行うこと
  - ・まとめの学習として、毎回の授業時に振り返りのアンケートを配付し、それぞれの学びや考えをまとめ、振り返る

c. 授業等の計画

1. <テーマ> 講義のねらいと概要, 「私」と「あなた」  
 <内容> オリエンテーション, 「私」と「あなた」を振り返るワークセッション  
 <到達目標> 授業実施にあたっての確認事項の理解, 講義体系の理解, 自分に気づき, 他者とのかかわりを深める
2. <テーマ> 聞き方と話し方 (1), ハンドマッサージについて (1)  
 <内容> 効き方と話し方の方法についての知識を深める, ハンドマッサージに関する理論  
 <到達目標> 効き方と話し方の方法について講義を通して理解する, ハンドマッサージに関する理論を理解する
3. <テーマ> 聞き方と話し方 (2), ハンドマッサージについて (2)  
 <内容> 効き方と話し方の方法についてのワークセッション, ハンドマッサージに関する技術  
 <到達目標> 効き方と話し方の方法について実技を通して理解する, ハンドマッサージに関する技術を理解する
4. <テーマ> 聞き方と話し方 (3), ハンドマッサージについて (3)  
 <内容> 効き方と話し方の方法についてのワークセッション, ハンドマッサージに関する技術  
 <到達目標> 次回の高齢者との出会いに向けて自らの効き方と話し方に自信を持つ, ハンドマッサージに関する技術を理解する
5. <テーマ> 施設への訪問 (1)  
 <内容> 施設見学と高齢者との出会い  
 <到達目標> 初めての出会いを通して, 「自分」と「あなた」のつながりについて考える
6. <テーマ> 施設への訪問 (2)  
 <内容> 自己紹介  
 <到達目標> 自己紹介をして, 実際に「自分」と「あなた」のつながりについて考える
7. <テーマ> 高齢者との触れ合い体験 (1)  
 <内容> 高齢者との会話とマッサージ  
 <到達目標> 会話とマッサージをしながら, 高齢者との触れ合いを感じる

8. <テ ー マ>高齢者との触れ合い体験 (2)  
 <内 容>高齢者との会話とマッサージ  
 <到達目標>会話とマッサージをしながら、相手の状況を知る
9. <テ ー マ>高齢者との触れ合い体験 (3)  
 <内 容>高齢者との会話とマッサージ  
 <到達目標>会話とマッサージをしながら、相手を受容する
10. <テ ー マ>高齢者との触れ合い体験 (4)  
 <内 容>高齢者との会話とマッサージ  
 <到達目標>会話とマッサージをしながら「私」を伝える
11. <テ ー マ>高齢者との触れ合い体験 (5)  
 <内 容>高齢者との会話とマッサージ  
 <到達目標>会話とマッサージをしながら、共感する
12. <テ ー マ>高齢者との触れ合い体験 (6)  
 <内 容>高齢者との会話とマッサージ  
 <到達目標>会話とマッサージをしながら、ニーズを知る
13. <テ ー マ>高齢者との触れ合い体験 (7)  
 <内 容>高齢者との会話とマッサージ  
 <到達目標>会話とマッサージをしながら、自らを振り返る
14. <テ ー マ>高齢者との触れ合い体験 (8)  
 <内 容>高齢者との会話とマッサージ  
 <到達目標>会話とマッサージをしながら、理解し合う
15. <テ ー マ>まとめ  
 <内 容>グループ討議による振り返り、発表、まとめ  
 <到達目標>授業理解度の自己確認

授業のねらいとしては、福祉の領域を学び、福祉領域の職業を目指す総合福祉学部の学生を考慮して、全学生共通の「対人関係づくりの大切さ」に気づき、人と人とが共に生きる「共生」の意識を育むことをねらいとしている。また、その気づきや意識の育みが個人での学習の流れだけではなく、受講生同士が気づき、考え合う力を育むこともねらいの一つとしている。具体的な授業方法とその内容については③授業方法の4つの柱にて述べていくこととする。

## ② 受講生数・実施場所・実施期間・触れ合い対象者・学習支援者

- ◎ 受講生：科目履修学生8名と聴講学生6名の計14名の受講生
- ◎ 実施場所：第1回目から第4回目までの授業を大学内の教室、第5回目以降を高齢者福祉施設淑徳共生苑のデイサービスセンター内の2カ所
- ◎ 実施期間：平成21年4月～7月
- ◎ 触れ合い体験の対象者：デイサービスセンターに通所している利用者約16名
- ◎ 学習支援者：授業担当教員、ハンドマッサージの専門家、淑徳共生苑施設長、淑徳共生苑デイサービスセンター相談員

本授業プログラムでは、授業担当である教員に加え、ハンドマッサージの専門家と淑徳共生苑施設長と同デイサービスセンター相談員が、授業の計画・立案から、プログラムデザイン、運営までをそれぞれが担うこととした。その理由として、第一に本授業プログラムでは、受講生が言語的・身体的コミュニケーションに取り組むことに上げられる。そのコミュニケーションの対象者がデイサービスセンターの利用者であるため、高齢者一人ひとりの健康状態や細かな配慮点などを考慮し、授業プログラムを企画・立案する必要性があった。このため、淑徳共生苑施設長と同デイサービスセンター相談員も受講生とデイサービスセンターの利用者にかかわるプログラムデザイン、運営に至るまでの学習支援者となった。

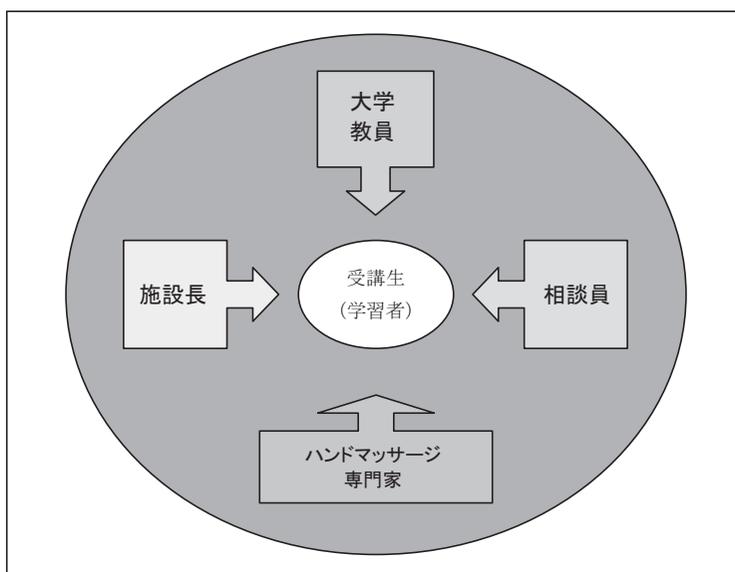


図1 総合的な学習支援

また、第二として、本授業プログラムでは会話などの言葉でのコミュニケーションだけではなく身体的コミュニケーションを取り入れるために、その方法として「ハンドマッサージ」を選択した。このため、ハンドマッサージの理論や技術を受講生が学習するためにハンドマッサージの専門家も学習支援者となり、ハンドマッサージにかかわるプログラムデザインや運営を行った。

よって、本授業プログラムは、それぞれの専門領域にかかわる学習支援者が存在し、図1に示されるように、それら一人ひとりが専門領域の知識・技術を集結して企画立案し、受講生の学習支援を目指した計画である。

### ③ 授業方法の4つの柱

授業方法等としては、「人間関係づくりに必要な知識・教養を学ぶ」「肌の触れ合い（ハンドマッサージ）を通じた体験を行うため、ハンドマッサージの理論と技術を学ぶ」「高齢者との触れ合い体験をする」「互いに体験したことを発表し、ディスカッションする」を主な4つの柱として進行した。

「人間関係づくりに必要な知識・教養を学ぶ」では、授業の計画にあるように、実際の高齢者との触れ合い体験前の第1回目から第4回目までの授業時にさまざまなワークセッションを通じて人間関係づくりにおける話し方や聞き方の知識を深め、実践した。実際のワークセッションの内容は表1の通りである。受講生が実際の高齢者との触れ合いで学びを深めるだけでなく、これらのワークセッションを通して人間関係づくりにおける今の自分と目標としていく自分のあり方を認識し、さらに出会っていく「あなた」を考えていく力を育むことを目標とした。

表1 人間関係づくりワークセッション

授 業	内 容
第1回目	自己紹介と他者紹介（自分を知り、あなたを知ること）
第2回目	「話すこと」と「聞くこと」を考える
第3回目	人がコミュニケーションを取るときに使う手段とは？
第4回目	背中合わせでコミュニケーション（バーバルとノンバーバルの表現）

「肌の触れ合い（ハンドマッサージ）を通じた体験を行うため、ハンドマッサージの理論と技術を学ぶ」では、授業計画にあるように、実際の高齢者との触れ合い体験前の第1回目から第4回目までの授業時にさまざまな講義と実践を通して、ハンドマッサージに関する理論を学び、技術を習得した。実際のハンドマッサージの理論と技術を学ぶ内容は表2の通りである。また、ハンドマッサージの技術の習得には、実践の積み重ねが必要であることを考え、第3回目から第5回目の授業の復習として3人以上のハンドマッサージを行うことを課題とした。さらに、この課題では受講生各自がハンドマッサージノートを用意し、対象となった一人ひとりのハンドマッサージ記録を作成し、「相手が癒されたと思ったのか？」「やってみた自分の気持ちはどうであったか？」「どんな風に変化をしたのか？」「ハンドマッサージをする前の相手に対する親近感度は6段階で評価すると何か？」「その他、気づいたことがあれば好きなように綴る」の5つの点を振り返るように指示した。このノートを作成することにより、マッサージの技術をより向上させていくと共に、学生自らが復習・予習する状況を導き出すことを目的とした。

表2 ハンドマッサージの理論と技術

授 業	内 容
第1回目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「手」と「癒し」について</li> <li>・ハンドマッサージを通じ「あなた」「私」共生の気持ちを育む</li> <li>・コラム:手は外部の脳である,「手」という言葉について,「手当て」,「手」にありがとう,「手」はいつも自分の目先にある</li> </ul>
第2回目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハーブ, アロマセラピー, 月桃について</li> <li>・コラム:日本人のハーブと香, 江戸しぐさ</li> </ul>
第3回目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手のツボや経路, 呼吸の仕方</li> <li>・東洋医学にまつわるハンドマッサージ</li> <li>・ハンドマッサージの実際(ハンドマッサージ技術の実践)</li> </ul>
第4回目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハンドマッサージの実際(ハンドマッサージ技術の実践)</li> </ul>

「高齢者との触れ合い体験をする」では、授業の計画においては第5回目から第14回目までの授業時に淑徳共生苑のデイサービスセンターを訪問し、さまざまな触れ合い体験を計画していたが、学生と利用者である高齢者の状況を考慮して一部計画内容に修正を図りながら実施した。実際には第5回目から第15回目において高齢者との触れ合い体験を実施し、その具体的な授業内容は表3の通りに行った。毎回の授業終了後には、触れ合い体験振り返りシートと触れ合い体験後のアンケートに記入することを課題とした。触れ合い体験振り返りシートでは、「触れ合い体験について」「ハンドマッサージについて」「その他の感想や考え」の3項目を自由記述にて記入することを課題とした。また、触れ合い体験後のアンケートでは、触れ合い体験をした利用者の方に受講生自身が、「触れ合い体験について」「ハンドマッサージについて」「ハンドマッサージ後について」「その他の感想や考えについて」を質問し、

表3 高齢者との触れ合い体験

授 業	内 容
第5回目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設内の見学と説明</li> <li>※施設内の見学とデイサービスの一日流れや利用者の様子を知る。</li> <li>・出会いのアルバム</li> <li>※4グループに分かれて、互いに自己紹介をする。</li> <li>※グループ毎に写真を撮り、フォトフレームを作成して部屋の壁に貼り付ける。</li> </ul>
第6-9回目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者と会話を通して、触れ合う</li> <li>※グループ毎に、会話のみの触れ合い体験をする。</li> </ul>
第10-14回目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者と会話とハンドマッサージを通して、触れ合う</li> <li>※1対1でハンドマッサージをする。</li> </ul>
第15回目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思い出のアルバム</li> <li>※模造紙に、これまでの触れ合い体験の写真や装飾を貼り付けながら語らう。</li> </ul>

感想を聞くことを課題とした。このような課題を行うことで、受講生自らの振り返りの機会を作るだけでなく、利用者の感想を通して、相手がどのように体験を受け取り、考えたのかを理解し、相手を捉え、よりよいコミュニケーションを図れるようにしていくことを目的とした。また、この触れ合い体験振り返りシートと触れ合い体験後のアンケートは、実際の触れ合い体験に入る前の第4回目の授業における受講生同士のハンドマッサージを実施した後に、記入することを課題とした。このことにより、記入することに対する事前学習を行うことへの配慮を行った。

「互いに体験したことを発表し、ディスカッションする」では、授業計画においては第1回目から第4回目の毎回授業時と第15回目のまとめで行う予定でいたが、一部計画修正を図り、第1回目から第4回目に加え、第5回目から第15回目の行き帰りのバス移動時間（毎回30分間）に体験したことを一人ひとりが振り返って発表し、ディスカッションを行った。この繰り返しにより、高齢者との触れ合い体験に向けて自己の反省と次への目標の明確化し、触れ合いの対象者である高齢者のさまざまなことへの理解の深めることを目的とした。また、その内容を受講生が互いに話し合うことで、他者の体験を受けとめ、自分の体験と照らし合わせながら考える力を育むことも目的とした。

#### IV. 学生の「意識」と「行動」の変化

自由演習Cの一連の学習とコミュニケーション活動を通して、学生の意識や行動は、その場面毎の変化が出現した。それは、さまざまな学習方法や技能、社会との関係性から学び得た変化であると考えられる。ここでは、その学生の「意識」と「行動」の変化を前述した授業方法の4つの柱から導き出された学生の姿を中心に捉えていきたいと考える。

##### ① 自らの状況を客観的に捉え、「私」と「あなた」の関係を見直す

前述した通り、「人間関係づくりに必要な知識・教養を学ぶ」では第1回目から第4回目までの授業において、前述の表1のような流れの中で3つのワークセッションを行った。その3つのワークセッションそれぞれにおける学生の意識と行動の変化をa～dに述べていくこととする。

##### a. 自己紹介と他者紹介（自分を知り、あなたを知ること）

このワークセッションでは、二人一組に分かれて2分間の自己紹介を行い、その後、四人一組となって自己紹介を受けた相手の他者紹介を他のメンバーに行うように指示した。その後、受講生一人ひとりがこのセッションを通して感じたこと・気づいたこと・考えたこと等を発表した。それら発表から、自己紹介では自分を表現していくことの難しさや伝えることの難しさ等の自分自身の反省点を導き出すと共に、相手の自己紹介を聞くことで紹

介方法の工夫や相手のことをよりよく聞くための質問方法の工夫が必要であることに気づく等、自らの話し方や聞き方への気づきが得られた様子であった。また、他者紹介においては、相手の話を表面的に聞くのではなく、注意深く聞くことの大切さや自らが聞いたことを伝えていく話し方の技術の難しさに気づく等、自らの話の聞き方と伝え方への気づきが得られた様子であった。

b. 「話すこと」と「聞くこと」を考える

このワークセッションでは、受講生全員が参加し、5分以内に声に出した言葉をつかわずに1月～12月までの生まれた月日の順番に並ぶように指示し、並んだ後にそれぞれの生まれた月日を発表し合った。その後、一人ひとりがこのセッションを通して、人がコミュニケーションを取る際に声をつかった言葉が使用できないことがどのような影響があるのか、普段の「話すこと」と「聞くこと」振り返りどのような違いがあるのかを次の授業までに考えてくることを課題とした。

c. 人がコミュニケーションを取る時に使う手段とは？

前回のワークセッションを通して、人がコミュニケーションを取る時に使う手段とは何かを考えるワークセッションを行った。まず、教員が「人はコミュニケーションを取る時にどのような手段を使うのか？」という質問を投げかけ、受講生一人ひとりが感じたこと・気づいたこと・考えたこと等を発表した。それらの発表から、人はコミュニケーションの取る時の手段として、声を通した言葉を使用し、受け取ることだけでなく、うなずきや視線、手振り、身振り、表情等の声を通した言葉以外での行動から情報を受け取る重要性や自分の情報を細やかに伝え、相手の情報を受け取ろうという気持ちの重要性に気づきが得られた様子であった。

d. 背中合わせでコミュニケーション（バーバルとノンバーバルの表現）

このワークセッションでは、受講生が二人一組となり、以下の手順で「背中合わせでコミュニケーション」を行った。

- (1) 背中合わせで座る。
- (2) A3用紙の上を二つ折りにしてから開き、上半分に5分間にて自由に好きな絵を描く。
- (3)じゃんけんをして勝った人が、(背中合わせのまま) 自らの描いた絵についてA4用紙の上に説明文を書き、負けた人に渡す。その渡された説明文を元に負けた人はA3用紙の下半分に勝った人が描いた絵を描く。(10分間)
- (4)じゃんけんをして負けた人が、(背中合わせのまま) 自らの描いた絵について言葉で説明し、勝った人がA3用紙の下半分に負けた人が描いた絵を描く。(10分間)
- (5) 絵を見せ合う。

その後、受講生一人ひとりがこのセッションを通して感じたこと・気づいたこと・考えたこと等を発表した。それら発表から、前回のワークセッションで気づいた声を通した言葉を使用し、受け取るだけでなく、うなずきや視線、手振り、身振り、表情等の声を通した言葉以外での行動から情報を受け取る重要性や自分の情報を細やかに伝え、相手の情報を受け取ろうという気持ちの重要性により深まりのある気づきが得られた様子であった。また、今回のワークセッションでは、書くことで説明をすることと言葉で説明することを取り入れたことにより、人それぞれによってどちらの説明の方が情報を受け取りやすかったのが異なるため、書き言葉にしても話し言葉にしても情報の伝え方が重要であることへの理解が深まった様子であった。



図2 背中合わせでコミュニケーション

以上のように、3つのワークセッションを通して、学生は自らがコミュニケーションを取る方法の状況を客観的に捉え、「私」と「あなた」の関係を見直すことが可能となった。この学生の意識と行動の変容には、出会う → 知り合う → コミュニケーションを取る → 緊張がほぐれる → (コミュニケーションを取ることへの) 興味・関心をひく → (コミュニケーションを取ることへの) やる気が起こる → 自らの状況に気づく → (「私」と「あなた」の関係を見直すことへの) 意欲がわく の8つの流れが存在する。これは、学生の動きや学生相互の関係性、学習課題への取り組み姿勢等、学習者である学生自身の変容プロセスとして重要な導入となっていると考える。

## ② ハンドマッサージを通して、相手を見つめ、近づく

前述した通り、「肌の触れ合い（ハンドマッサージ）を通した体験を行うため、ハンドマッサージの理論と技術を学ぶ」では、授業計画にあるように、実際の高齢者との触れ合い体験

前の第1回目から第4回目までの授業時にさまざまな講義と実践を通して、ハンドマッサージに関する理論を学び、技術を習得した。この時期のそれぞれにおける学生の意識と行動については、学生が作成したハンドマッサージノートからその変化を述べていくこととする。

ハンドマッサージノートの作成では、「相手が癒されたと思ったのか?」「やってみた自分の気持ちはどうであったか?」「どんな風に変化をしたのか?」「ハンドマッサージをする前の相手に対する親近感度は6段階で評価すると何か?」「その他、気づいたことがあれば好きなように綴る」の5つの点を振り返るように指示していた。これら記入された学生のノートの内容例が以下の通りである。

4/22	...	18時頃/寮にて/友人/初めて/相手は癒されたと思う/(ハンドマッサージの)やり方を習ったのでやりやすかった,でも当たっているかどうかまだ不安で思い出しながらがんばった/親近感度4→4
4/30	...	21時頃/寮にて/友人/2回目/あまり癒されなかったと思う,力加減が難しかった,弱すぎるとくすぐったい強すぎると痛いと言われてしまった/親近感度5→5
5/10	...	12時頃/家にて/母親/初めて/とても癒されたと思う/母の日だったこともあって喜んでくれた,気持ちが良くと何度も言ってくれてこっちが逆に嬉しくなった/親近感度5→6
5/14	...	12時半頃/大学/友人の友人/初めて/たぶん癒されたと思う,友人の友人であったためあまり話したことの無い子だったがハンドマッサージを通して仲良くなれた/親近感度2→3
6/13	...	21時頃/友人/2回目/癒されたと思う,最近あまり話をしていない子だったのでハンドマッサージを通して徐々にゆっくりと話ができた/親近感度3→4
6/16	...	18時頃/友人/初めて/癒されたと思う,気持ちが良くと言ってもらえた/親近感度3→4

この記述内容から、学生がハンドマッサージの回数を重ねる毎にその技術を向上させるだけでなく、ハンドマッサージを通して相手の気持ちの状況やその理解を深めていることがわかる。これは、ハンドマッサージという身体的コミュニケーションがきっかけとなり、相手を見つめ、近づくことへと繋がっているのである。「人間関係づくりに必要な知識・教養を学ぶ」と同様に、この学生の意識と行動の変容には、「出会う」 → 「知り合う」 → 「コミュニケーションを取る」 → 「緊張がほぐれる」 → 「(コミュニケーションを取ることへの)興味・関心をひく」 → 「(コミュニケーションを取ることへの)やる気が起こる」 → 「自らの状況に気づく」 → 「(「私」と「あなた」の関係を見直すことへの)意欲がわく」の8つの流れが存在する。これは、学生の動きや学生相互の関係性、学習課題への取り組み姿勢等、学習者である学生自身の変容プロセスとして重要な導入となっていると考える。

### ③ 出会い、体験し、関係性を育てる

前述した通り、「高齢者との触れ合い体験をする」では、第5回目から第15回目までの授業時に淑徳共生苑のデイサービスセンターを訪問し、さまざまな触れ合い体験を実施した。この時期のそれぞれにおける学生の意識と行動については、学生が作成した触れ合い体験振り返りシートからその変化を述べていくこととする。

触れ合い体験振り返りシートの記入では、「触れ合い体験について」「ハンドマッサージについて」「その他の感想や考え」の3項目を自由記述にて記入することを課題としていた。第5回目から第8回目までの授業では、初めての出会いから共同の作業、会話のみでのコミュニケーションを通して、触れ合い体験を行った。この期間の学生の触れ合い体験振り返りシートには、次のようなことが記入されている。

<5/20>写真撮影およびフォトフレームづくり

学生Y.B → 「はじめはこちらから話しかけても話がとぎれてしまった。しかし、一緒に写真フレームを作成することで自然に会話ができ、会話が弾むようになった。…(中略)…利用者さん一人ひとりのことをたくさん知っていききたい。」

学生T.S → 「飾りをつけてもらう時、無理にやっているとそれ以上進めるのは強引のように感じ、困りました。人付き合いは苦手なので、今回の触れ合い体験は今まで以上に緊張し、とても不自然でした。次回はもう少しまともな自己紹介をしたいです。」

学生M.T → 「始まって何話をしたら良いかわからず詰まることがあった。(写真フレームづくりの)サポートするというのを少しやりすぎた気がする。消極的な方だとのように接した方が良いのかわからない。参加するのを促した方が良いのかな?無理をさせても良いのかな?」

第5回目の授業である5/20は、高齢者との初めての出会いを通して、自己紹介や写真撮影、フォトフレームづくりを行った。この時期の学生の触れ合い体験の振り返りシートには、「(触れ合う相手の)たくさんを知っていききたい」という“期待”の感情と「緊張し、とても不自然だった」や「何を話したらいいのかわからない」等といった“不安”の感情が表現されている。

第6回目の5/27と第7回目の6/3には、引き続き会話のみでのコミュニケーションを行った。個別とグループでのコミュニケーション形態の違いはあったものの、この時期の学生の触れ合い体験の振り返りシートには、「(高齢者の人と)話しをしていると、会話の力がつけられる気がした」や「戦争のお話の会話を続けるためにも戦争について調べて勉強しなければいけないと思いました」、「Kさんはいろいろなことをよく知っていて、知識を教えてください」等というように“相手を知って互いに合わせていくこと”の大切さに気づいたり、「手をつなぎながら歩いた」ことで“身体的なコミュニケーションからの気持ちの繋がり”の感

<5/27>会話でのコミュニケーション（個別で自由な形態）

- 学生 Y.M → 「前は作業と会話だったけれど、今回は会話のみだった。現在の話をしようと思ったけど、全部自分の昔の話へと変わっていった。（高齢者の人と）話しをしていると、会話の力がつけられる気がした。」
- 学生 T.S → 「決められた作業がないとどうやって話しかけたらいいのかかわからず、とても慌てました。無理に話そうともしていましたが、相手の話しやすい話題がどんなものなのか悩みました。」
- 学生 S.S → 「Yさんと話し、周りから見られて初めよりも楽しそうだったと言われたが、うまく聞き取れない時が何度かあり、どうしようかと思ったけれど、楽しんでもらえて良かった。Sさんは私からよりも話しかけてくださった。Kさんはいろいろなことをよく知っていて、知識を教えてくれた。いたずら好きの一面もあり、木魚をふざけてたたいたり、蜂の巣を落としたりしていた。」
- 学生 Y.M → 「Tさんは戦争の話をしてくださったのですが、戦争のお話の会話を続けるためにも戦争について調べて勉強しなければいけないと思いました。」
- 学生 Y.T → 「会話の途中から、屋上に行くことになった。お年寄りの方と、手をつなぎながら歩いた。最初は少し緊張したが、そのうち緊張がほぐれた。いつの間にか、手をつないでいることが自然のようだった。」

<6/3>会話でのコミュニケーション（グループ毎に自由な形態）

- 学生 Y.M → 「私は話をすることが苦手で、いつも受け身でしたが、今日Sさんと会話している時、私の手を触れながら会話をしていて、いつもより心が和らいだような力を抜いてSさんと会話を楽しむことができました。」
- 学生 T.M → 「戦争の話がほとんどだった。かなり疲れた。どうしたらよいか分からなくなった。恥ずかしがっていたらダメなのは分かるけど、なかなか恥ずかしさが抜けない。」
- 学生 M.K → 「あなた達はすごく幸せよと何度も言われました。利用者さんたちと話していると自分の悩みやいろんなことが小さく感じた。自分自身を見つめ直すよい時間だと思いました。利用者さんから手を握ってもらったのが嬉しかった。」



情が生み出されている。これは、第5回目の最初の出会いに比べ、コミュニケーションへの集中や相互理解の深まり、信頼感の芽生え等といった学習が展開していくことの始まりを示す意識と行動の現れであると考えられる。

<6/10>会話でのコミュニケーション（個別でアンケートを通しての会話）

学生 M.S → 「マイナス的な質問はやはり聞きにくい。質問をどのように聞けば良いのが迷った。質問をそのまま言うのではなく、言い換えたり、例をつけたり工夫するべきだったと反省した。」

学生 T.S → 「POMSは、怒るとか悲しいとかという質問だったので、だんだん顔が暗くなったりして、聞き難かった。」

学生 Y.M → 「SさんにPOMSで質問していく中で、言いたいことを言う方なのだとすることがわかった。イライラすること、モヤモヤすること、悲しいこと、うんざりすること…自分の中で溜めずに周りの人と関わっている方なのだということが会話の中でわかり、私はすぐに溜めてしまうので、Sさんはさっぱりしていいなと思いました。」

第8回目の6/10には、これまで同様に会話のみでのコミュニケーションを行ったが、「アンケート（心理検査POMS）を取る」という課題を出しながら、コミュニケーションを取ることとした。これは、筆者らが学生との触れ合い体験を通して高齢者の感情にどのような感情変化を与えるのかを確認するために取り組んだ心理検査である。触れ合い体験としては特別なシチュエーションではあったが、コミュニケーションを取る際に「(相手の)考えを問うこと」の場面を経験することも大切であると考え、学生一人ひとりに取り組むように課題を与えた。この時期の学生の触れ合い体験の振り返りシートには、「質問をそのまま言うのではなく、言い換えたり、例をつけたり工夫するべきだった」や「自分の中に溜めずに周りの人とかかわっている方なんだということが会話でわかり、私はすぐに溜めてしまうので、Sさんはさっぱりしていいなと思いました」等というように“相手との会話を通して、自分と向き合う”感情が生み出されている。これは、学習が展開していくことや成し遂げることへの深まりを示す意識と行動の現れであると考えられる。

第9回目から第11回目までの6/17-7/1には、会話だけでなくハンドマッサージを通した触れ合い体験を行った。この時期の学生の触れ合い体験の振り返りシートには、これまでとは大きく異なった意識や行動の変容が現れた。「自分も気持ちがいよとかリラックスした方がよいことが少し分かったように感じた。なぜなら、これらの気持ちが多少なりとも相手に伝わってしまうと感じたからである。」や「経験を積みれば積むほど気づくことが多いと感じた。…(中略)…前回よりも今回、今回よりも次回と上達していきたいと思った。」等というように“自己の振り返り”を行い、“自己の再発見”と“行動変容”への感情が生み出されている。これは、学習が学ぶことから実行することへの変容やわかることから変わることへの深まりを示す意識と行動の現れであると考えられる。

<6/17-7/1>会話とハンドマッサージを通して触れ合う前半（個別で自由な形態）

学生Y.T → 「ハンドマッサージを始めると、私自身も落ち着きを取り戻せるようになった。進めて行くにつれて、相手の方が気持ちよさそうにしてくれているのが嬉しかった。ハンドマッサージをする際には、自分も気持ちがいとかリラックスをした方が良いということが少し分かったように感じた。なぜなら、こちらの気持ちが多少なりとも相手に伝わってしまうと思ったからである。ハンドマッサージの難しさを改めて感じる体験だった。」

学生Y.B → 「Tさんと話したのは2回目であったが、以前と比べて驚くほど自分からいろいろな話をしてくださった。そして、最後に「私にはこんなふうにゆっくり話を聞いてくれる人はいないので、今日は良かった。」と言って頂けた。それが何よりも嬉しく感じ、また利用者さんもその時の気持ちやコンディション、または状況によっても変わってくるのだと思った。」

学生S.S → 「ハンドマッサージの片手が終わると「もういいわよ。」と言ってくださった。私は疲れてしまったのかそれとも気持ちよくなかったのかなど不安になったが、Tさんに聞くと「あまりやってもらうとあなたが疲れちゃってかわいそうだから」と私のことを気にしてくださっての一言であった。私が大丈夫ですよという「じゃあ」と微笑みながら手を出してくださった。Tさんの私に対する優しさが嬉しかった。」

学生M.Y → 「触れ合ったことで、利用者との距離が近くなり、関係というのも前より近くなれた。」

学生Y.T → 「経験を積み重ねるほど気づくことが多いと感じた。前回の反省を生かすことができたし、新たに触れあい体験時の聞き方をこうすれば良かったなどの反省も出てきた。前回よりも今回、今回よりも次回と上達していきたいと思った。」

第12回目から第14回目までの7/8-7/22には、会話だけでなくハンドマッサージを通じた触れ合い体験も後半に入っていった。この時期の学生の触れ合い体験の振り返りシートには、「楽しんでできた」や「私が普通に楽しんでいる感じ」、「ハンドマッサージを通して近くなっている」、「毎回、ありがとう等の感謝の気持ちを伝えてもらえることが嬉しい」等というように、他者との“わかちあい”の感情が生み出されている。これは、学習が個人だけでなく、互いに思いを確認しあい、共有していくことへの変容を示す意識と行動の現れであると考えられる。

<7/8-7/22>会話とハンドマッサージを通して触れ合う後半（個別で自由な形態）

学生 M.T → 「楽しくできた。相手の方がいろいろと私達のことを気にかけてくれているように感じる。」

学生 M.T → 「どうしたら、さらに気持ちよくなってくれるだろうと考えて取り組んだ。また、ゆっくりと丁寧に行うことに気を付けた。」

学生 Y.M → 「Sさんが前回にも触れ合ったことを覚えていてくださって、嬉しかったです。前回よりも話が弾み、楽しかったです。ありがとうという言葉だけではなく、心から出てくると言われたときに嬉しかったです。ハンドマッサージを通して、近くなっていることが実感できました。」

学生 M.Y → 「やる気を持って望めた。気持ちがよいと言われてやりやすかった。毎回、ありがとうなどの感謝の気持ちを伝えてもらえることがとても嬉しい。これがあるから次回もがんばれると思う。」

学生 M.S → 「七夕で歌を歌った話などさまざまな話を聞いた。自分自身が慣れてきたからなのかスムーズに話ができるようになり、利用者さんもリラックスしている様子であった。私が普通に楽しんでいる感じだった。」



#### ④ シェアリングから新たな「始まり」が生み出される

前述した通り、「互いに体験したことを発表し、ディスカッションする」では、第1回目から第15回目に体験したことを一人ひとりが振り返って発表し、ディスカッションを行った。これらの繰り返しのより、回数を重ねるごとに学生一人ひとりが活動を通してどんな感想を持ち、何を感じたかを知り合い、確認し、共有することで、次の新たな目標・目的を明確にしていく姿が見られた。特に、学生の意識と行動の変容が顕著に現れ、新しい活動と状況が生み出された第14回目の互いに体験したことの発表とディスカッション場面から第15回目の触れ合い体験場面を取り上げ、筆者らの目を通して感じられた学生の意識と行動について述べていくこととする。

<第14回目の互いに体験したことの発表とディスカッション場面>

◎通常通り、バス車内において学生同士が互いに体験したことを発表している最中、学習支援者である教員から次週が最後の授業時間であることが告げられた。授業計画当初は学内でのまとめの学習を予定していたが、受講生とデイケアセンター高齢者の「最後まで触れ合いたい」という気持ちが生み出されたことにより、最終日まで触れ合い体験を実施することとなった。そこで、学習支援者らは学生に最後はどのように触れ合いたいのかと問いかけた。すると、「高齢者の皆さんが歌を歌うことが好きだといっていたので一緒に歌を歌いたい!」との意見が出された。また、これまでに学習支援者らが記録していた写真をみんなで振り返りながら一枚の大きな思い出のアルバムづくりを行うこととなった。発言内容から、どこか楽しみなようであり、次週が最後であることに淋しさも感じている様子であった。

<第15回目の触れ合い体験>

◎行きのバスの中ではどの歌を歌おうとの選曲をしたり、一人ひとりの利用者への話題も出されながら、最後の触れ合い体験への意欲が見受けられた。到着後、多目的ホールに材料を用意し、学生各自がデイサービスセンターで高齢者一人ひとりの元へ歩み寄り、思い出アルバムづくりをしましょうと声をかけていた。実際の作成場面では、これまでの流れの中で一番賑やかというほど多目的ホールには笑い声や会話が溢れ、学生も高齢者も皆生き生きとした表情で活動が進められていった。「写真と一緒に映っていて嬉しい。」等というような言葉があちこちで行き交い、あっという間に時間が過ぎ去っていった。この盛り上がりから、当初予定をしていた歌をともに歌うことができなかったが、皆最後の体験を楽しんでいる様子であった。その間、学習支援者らは指示・指導は出さず、見守るだけの姿勢で取り組んだ。まさに、学習の主体である学生たちと高齢者たちが築き上げた触れ合い体験の場であった。



この第14回目終了後の話し合いの姿と第15回目の触れ合い体験の姿には、学生の意欲・態度・情緒・実践・行動の変化だけでなく、これまで経験し習得してきたことをもとに、一人ひとりが自主的に判断し、場を創造していく力が発揮されていると考える。それは、学生たちが与えられた環境の場で知識や技術を習得していく学習者としてその場に存在するという段階から、学習したことから新たなことの「始まり」を生み出す実行者へと変容している姿であった。

## V. ハンドマッサージがコミュニケーションに与える可能性

本授業プログラムでは、前述したとおり会話による言語的コミュニケーションと共にハンドマッサージによる身体的コミュニケーションを実施し、学生の意識と行動の変容を捉えてきた。この中で、筆者らは、特にハンドマッサージでの身体的コミュニケーションを始めた時期から学生と高齢者の関係性が著しく変化したと感じた。ハンドマッサージは会話の中で進められる同時に当事者同士の触覚、さらには鼻を使って大脳へ届く嗅覚が加わっていくものと考えられる。この人間が感覚を通じてコミュニケーションをしているからこそ、精神的な部分だけでなく、相手の身体的な部分からも相手の状況を捉え、理解していくことの深まりが得られたと思われる。

実際に、会話のみのコミュニケーションからハンドマッサージを通して行った身体的コミュニケーションが加わった時期からの学生および高齢者の変化として次の点が上げられる。

- ①会話のみコミュニケーションのときは、一週間後に学生と再会しても忘れていた高齢者が多かったが、ハンドマッサージを始めてからは覚えていた人が多くなった。
- ②通常にハンドマッサージを行う際には、月桃のアロマエッセンシャルオイルが入っているクリーム\*を使用していた。しかし、一度だけ香りの入っていないオイルだけで行った場合、高齢者の方々からクレームがありやり直すことがあった。(学習支援者らで香りの効果はあるのかを確認するために試行した。)この時の高齢者との触れ合い体験の学生自身の印象としては、互いに香りがあったほうが会話などもスムーズであった。
- ③アロマエッセンシャルオイルが入ったクリームの方が身体の温まり具合に変化があった。(血のめぐり、循環があることによる効果など)
- ④学生がハンドマッサージを高齢者の方へ行った際、その高齢者が家族にハンドマッサージをしてあげたいという気持ちになり、私にもできるのかクリームはどこで購入できるかなどの意欲が導き出された。
- ⑤ハンドマッサージを行っている学生自身が、相手の手と触れ合うことで優しい気持ちや親近感、幸福感を得ていた。

つまり、コミュニケーションでハンドマッサージを取り入れることは心身の健康向上の可能性があるのでないかと考える。また、ハンドマッサージは、人と人とが身体的に触れ合うことにより、④や⑤に現れたような自分の気持ちが満たされ、他人へのアプローチにつながるような意識や行動の変容、自らの安心感や幸福感を味わえたのではないだろうか。

近年、ベビーマッサージの効果(梶, 2008)や、ハンドマッサージでの精神的なリラック

\*ムーンピーチ リヴァイブアロマトリートメントクリーム/レセラ社製

月桃精油配合スキンケア保湿クリーム。生姜の力である血行促す効果、肌荒れなどを落ち着かせる沈静の効果が兼ね備う。日本植物独特の落ち着く香りでアロマテラピーの気持ちや神経を落ち着かせる効果が期待できる。月桃(げっとう) 沖縄産ショウガ科多年草 [学名 *Alpinia zerumbet*]

スとしての効果（佐藤，2006）が報告されている。本授業の実施中の学生と高齢者の意識と行動変容から，コミュニケーションの手段として，さらには生活者である人の心身の健康手段としても効果的であるのではなかと考える。今後，このようなハンドマッサージによるあらゆる可能性についても研究を深めていきたい。

## VI. おわりに

一連の授業場面における学生の姿から，言語的・身体的コミュニケーションによって学生の意識と行動変容が伺える。その変容の流れには，図3に示されるような学習の3段階が導き出せる。

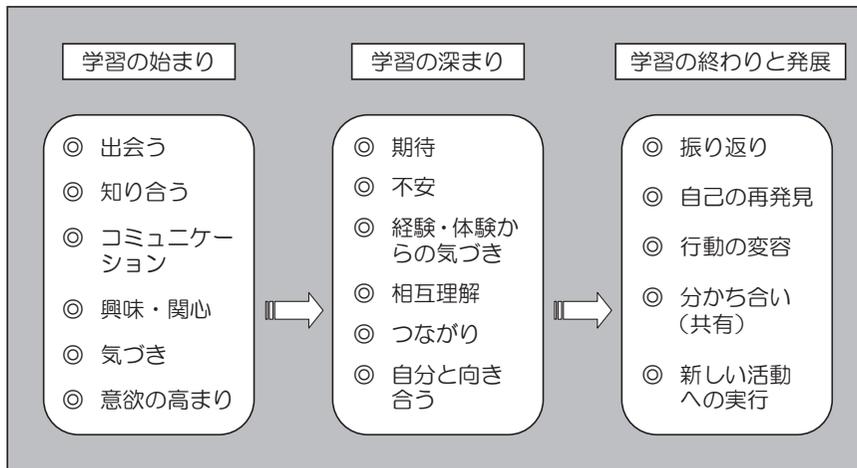


図3 学生の意識と行動の変容段階

これは，段階を経て言語的・身体的コミュニケーションが学生に与えた学習による変容であると考えられる。この学習の流れの中で，振り返りの感想等から主に人と接する対人援助職である福祉専門職を目指す学生としてのIdentityが培われる姿が見受けられる。特に，「当事者に立場や社会福祉にとって必要なことへの興味・関心」「自他ともに向けた振り返り」「他者・地域・社会に向けられた視点」では，高齢者との触れ合いという実際の体験によって福祉の対象者となる他者の立場と向き合い，見つけ，考え，理解を深め，実践し，振り返り，新たな活動を導き出すといった基礎を築いていった。このような学習体験が，福祉施設への実習前の段階の学生には，有効な学習過程であるのではないだろうか。

筆者らは，これら学生の意識と行動変容から，講義や実習というカリキュラム上の内容のみならず，専門職Identityを育む授業プログラムの開発と実践は重要であると捉え，今後も

取り組んでいく姿勢である。また、本授業プログラムでは、学生の意識と行動の変容であるのみならず、高齢者の気分と行動の変化もあった。特に、ハンドマッサージを取り入れた後には、体験の内容や触れ合った人との記憶が残ること、その後の日々の表情の豊かさが広がる等の変化には著しいものがあった。学生とのコミュニケーションが導き出したこの高齢者の変化、ハンドマッサージが人に与える可能性についても、今後研究を深めていきたい。

## 謝辞

本授業プログラムを実施するにあたり、淑徳共生苑の利用者の皆様、職員の皆様には多大なるご協力を賜りました。ここに記し、深く感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 1) 梶 美保 (2008) 『乳児保育におけるベビーマッサージの可能性に関する一考察』 高田短期大学紀要第26号 pp73-82.
- 2) 佐藤都也子 (2006) 『健康な成人女性におけるハンドマッサージの自律神経活動および気分への影響』 山梨大学看護学会誌第4巻第2号 pp25-32.
- 3) 仲本 美央 (2008) 『専門職アイデンティティを生み出す授業プログラム』 淑徳大学総合福祉学部研究紀要第42号 pp115-130.
- 4) 廣瀬 隆人他 (2000) 『参加型学習のすすめ方 ～「参加」から「参画」へ～』 ぎょうせい.

## 参考URL

レセラ有限公司ホームページ <http://www.rethera.co.jp>

## Changed in Consciousness and Behavior Through Verbal and Physical communication.

NAKAMOTO, Mio, USUKI, Tomomi, HAYASHI, Fusayoshi, ITO, Miwa

The purposes of this study were to develop a class program for building a professional identity within social welfare, and to report its effect on the students participating in the program. This program included interaction with elderly people in the Day-Service center. The results showed that, the class program promoted a sense of professional identity, and had a beneficial effect on the student's behavior.